

浄土

1988-6

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 毎月一回 日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別披承認雜誌) 第三五号
昭和六十二年五月二十五日印刷 昭和六十二年六月一日発行
第五十四卷 六月号



小林 治

六月の秀句

一群の梅雨の小草に晴間かな

宮坂 竹緒

草も木も静かな修行雨安居

勝崎 裕彦

千曲より水引き青田日々に濃く

岡田 日郎



六月号



彼の仏の国土には三悪趣なし。

——『阿弥陀經』

目次

——特別連載 第2回——

中国の道教と道教文化……………王 明……(2)

〔解説〕安居香山

《連載随想〔3〕》

佐用の腰掛け石……………高橋良和……(7)

＝にこにこ法話②＝

ミーちゃん塾へ行く？……………長谷川 岱 潤……(13)

東西宗教の交差点〔3〕

橋物語……………福嶋瑞江……(19)

《四行詩》

泰山木……………清川宗治……(26)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <15>

海と山の狭間で……………木下隆一……(28)

——我が思い出に住む犬たち(1)——

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第48回……………寺内大吉……(35)

弥陀の化身

挿絵 松濤 達文

表紙絵 小林治郎画

中国の道教と道教文化

中国社会科学院哲学研究所

研究員 王 明

〔解説〕 安居香山

（大正大学学長）

(2) 道教の主な方術

道教の方術は非常に多い。道教各派の方術には各々独自の傾向があり、概して論じることは難しい。一般的に言えば、神秘的方術と科学的技術との二類に分けることが出来る。人々を現実から離れさせて、幻境に引き入れるのは神秘的方術で、人類に有益な貢献をする

る方術は、科学技術だとみなしてよいと思う。古代の科学技術は往々にして神秘的方術と混同していた。例えば、医学と巫術はもともと分けられないものであったし、天文学と星占いの術、原始化学と不老長生の神仙煉丹術などもそうである。

さて、神仙道教の方術は非常に繁雑であるが、総じて云えば、不老長寿に関する方術で



——参拝者の絶えない道観（台湾・行天宮）——

あるといえよう。不老長寿に関する方術は、「宝精」、「行気」、「上薬の服用」という三項目に分けられる。晋の葛洪（二八四—三六四）から唐初の孫思邈（五八一—六八二）に至るまで、皆このように主張してきた。

「宝精」の術だけを挙げてても百ぐらいの数にのぼる。漢方医の考え方では、「精」、「氣」、「神」は人体の三つの宝であって、「宝精」とは、性生活において健康衛生を保つことである。『漢書』芸文志、方術略では、それを「房事」と呼び、一種の人体生理学と医学の総合的秘法で、いわゆる「楽しみて節あり、則ち和平にして長寿なり」で、若し発情に任せて思うがままにするならば、病氣になり、命を失うことにもなりかねないという。

「行気」の歴史は極めて古い。戦国時代に既に石刻文字『行氣玉佩銘』というのが出ており、そこには深呼吸運動が記述されている。

又『莊子』の中には吹、呵、呼、吸法など吐納の呼吸方法が記されている。後漢に至って道教が成立すると、それらの方術を吸収する。

その後、『老子章句』という書が世に出て、道教学者、例えば晋の葛洪、梁の陶弘景、唐初の孫思邈など、皆この「行気」を重視している。唐以後には、内丹練氣説が広まり、金、元代に至ると全真道派の氣功養生術は非常に系統化されてくる。

「行気」の方法も非常に多い。記載によれば、「行気」の効能はもろもろの病気をなおすことが出来るばかりか、疫病の予防、蛇やその他の野獣の襲撃からも逃れ、出血を止め、飢えと渴きからのがれ、長寿を保つことが出来るとされている。「行気」は古くは「吐納」とか「導引」とか称されていたが、現在では「氣功^{チキウ}」と通称され、医療保健体育に属している。道教の文献には「行気」の方法や秘訣

を記述した専門書も少くない。その後、氣功を修行する者の中にも、数多くの流派が生れた。

「上薬の服用」であるが、漢代の神仙家が丹砂^{サマ}を冶金して黄金に変える経験を含括し、金丹理論の専門書となったのは、まず魏伯陽の『周易参同契』である。彼は後世に「万古丹經の王」と称せられた。

魏晋時代の道教は神仙道教の方向に発展していった。葛洪は丹を煉り、金丹上薬を服用することを「仙道の極み」であると力説した。彼は「曾て養生の方術書と長生の秘訣を千巻以上も読破し、考察してみたが、金丹上薬をもってそれらの最高の方法とする」と認めている。彼の論拠は「五穀は人間を生かすことが出来る。人間がそれを食すると則ち生きることが出来る、絶えりと死に至る。しかし、金丹上薬は人間に益あること五穀より万倍であ

る。何故ならば金丹は焼けば焼くほどその変化が不思議である。黄金は火に入れてどんなに冶金しても減らず、埋めても永遠に朽ちない。それ故、この二つを服用すれば、人間の体は錬り鍛えられ、人間は不老不死を得ることが出来る」というのである。これは即ち、金丹という外物を借りて、自分の体形を固める方法である。これは前述の「宝精」、「行氣」で身体内の「氣」を調整する方法とは少し異っている。彼からみれば、「宝精」と「行氣」は、ただ神仙を求めるための二つの準備条件に過ぎないのである。

煉丹の秘法は非常に多い。往々にしてその秘法は、神秘性をともない口承されてきた。魏晉以後の道教学者、例えば、葛洪、陶弘景、孫思邈など著名な学者に、各々煉丹法に関する専門的研究があり、煉丹を実験した結果、卓越した成績をおさめた。それは煉丹術その

ものの変化や発展についての重要な認識が生れたばかりでなく、更に進んで原始的化学の探索にも役立った。例えば火薬の発明の如く、客観的には化学の発展に大きく寄与した。彼らの歴史的貢献は正にそこにあるのであって、金丹上薬を服用して神仙にたるという考えにいたっては妄想にしか過ぎなかった。歴史上多くの有名な道教学者が、修行と煉丹により神仙になれると信じ、しかもそれを鼓吹しながら、彼ら自らが金丹を服用しても、長生を求めることが出来なかったことを思うと、まことにナンセンスである。しかし、だまされたのは贅沢三昧、榮耀榮華にふける皇帝や貴族達であった。彼らは金丹を服用して神仙になる夢をみながら、あげくはそのために命を失ったのであるから。

道教がまだ成立していない頃から、すでに秦の始皇帝や漢の武帝などのように、不死の

薬を捜し求める例があった。その後、道教が最も栄えた唐代には、丹薬を服用して命を失った皇帝が後を絶たなかった。その結果、五代以後は、金丹を服用するいわゆる「外丹」派は、日々に衰亡の一路をたどって行き、これにとつて代つたのが「内丹」派で、急速に発展していく。

内丹派の中には、外丹派の金丹専門用語を借りてきて、実際には内丹を論じたり、又内丹の学説をもつて外丹の經典著作を解釈するものもでてきた。例えば、全真道派は主に内丹を重視している、内丹の方法は、往々にして疾病の予防、保健にその著しい効果をみせる。一般的に言えば比較的安全である。元代の著名な道士——丘長春は非常に秀れた人物で、西方に数万里も行脚して元の太祖ジンギスカンに会った。ジンギスカンは「真人は遠方から朕に会いにきたが、何か長生の薬でも

あつて、朕にもつてきたのか」とたずねた。丘長春は次のように答えた。「ただ養生の道があるのみで、不老長生の薬というものはありません」。それは事実をそのまま答えたわけだ、決してうまいことを言つて皇帝にへつらつたのではない。これは功名と富をむさばる世俗の道士より、ずっと清らかで賢明であると云わねばならない。

(注1) 「真人」 道家で道の奥義を悟つた人を指す。

〔解説〕 道教は宗教に違いないが、中国の民俗信仰を基盤として形成されてきたものであるため、神秘的方術を重視する面が強い。本論ではこれを歴史的に叙述している。道教の經典とされている当初の葛洪の『抱朴子』なども、そうした内容のものが数多く、目次を見ても、大略そうした面がよく分る。現世利益を中心とした中国独自の民俗宗教であつたし、いまでもその点では変ることがない。

佐用の腰掛け石



高橋良和
たかはし りょうわ

兵庫県佐用郡佐用町というのは、兵庫県と

岡山県の県境の兵庫県のはしである。

この地の郷土史家から連絡があつて、佐用町に法然上人の遺跡があるということであつ

た。

どうしてこのような上人に關係のない町に遺跡があるのかと不思議に思った。調査してみてわかつたのであるが、この地に法然上人

の腰掛け石があるということである。

そのような忠実や資料には、今までふれたことがないので、この佐用町を訪ねるより仕方がない。

それでなんとか調査したいと思って、岡山の誕生寺に赴いたかえりに、この佐用町にいった。

この町は中国縦貫道のインターの町であるので、割合いに便利であった。

町に入ったが、田舎の町とはいえ、かなり人も多く、さてその遺跡がすぐわかると思つた。

入口の一軒の家をたずねたところ、老婆が、その遺跡なら、この道を真つすぐいった左側にある、と教えてくれたので、真つすぐいくと、あった。

かなり広い場所であったが、車からおりてその遺跡に入つたところ、その遺跡の立札に

は、

この遺跡は、建武中興のときに後醍醐天皇が、京都から隠岐の島に御配流の際に、ここに逗流されたところである。

と記されていた。

後醍醐天皇の逗尚の地である。これは法然上人と全く関係がない。

しかしなんとか、法然上人の腰掛け石を探してかえりたいと思って、数軒の家を訪ねて聞いたか、いづれもそんな遺跡はしらないという返事である。

郷土史を研究するものにとって、このようなことは困ることで、どうしようもない。たしかにあることはあるのだろう。そこでこれは長老に聞くより仕方がないと思って、老人探しをはじめた。

はじめての家であるから、どれくらいの年齢の老人がいるかわからない。なんとか老人

にめぐり遇いたいと思って、あちこちを廻るうち、田圃で種まきをしている老人をみつけた。腰は二つ折になっているし、かつこうからはかなりの年齢であると思ったから、車をとめて畦道をこの老人のそばによった。

おたずねしますが、この佐用に法然上人の腰掛け石というのがありませんか。

すると老人は、

いやそのような石は、わしはしらんが、あの西山というところになぜかしら、変った石があるらしい。

おぼろ気な答えがかえってきた。

西山というのは、この中国縦貫道路のそばである。

ひとこといつてくれた。

しかし西山というのであるから、山であるかもしれない。上人はどうしてそのような山に登ったのであろうか、と不思議に思いなが

ら、途中で町の人々、数人に尋ねたところ、その西山は山ではなく、佐用町の字であることがわかった。

教えてもらった通り、うねうねとつづく町の道を中国縦貫道路にそって西の方にいくと、その道路のわき、いわゆる西山に石碑をみつけた。

その立札に「法然上人腰掛け石」と記されているのは、うれしかった。半ばあきらめてもう探すのをやめようと思っていた矢先であっただけに、まるで小躍りするような気持ちになった。

その石碑の表には、「法然上人腰掛け石」とはっきり読むことが出来た。

十五歳のとき美作の国から、比叡山へ勉強に向かった法然上人は、八十歳でなくなるまで故郷には一度も帰っていない。それなのにこのような腰掛け石が、どうして残っている

のかと、半信半疑に思いながら横の木の立札を読んだ。

そこにはこのように記してある。

法然上人は美作の国を出て、比叡山に登って浄土宗を開いたが、その後、度々故郷の美作の国に帰っている。そのときはいつもこの地を通ってこの石に腰をおろしたのである。村人たちは、この上人のすがにふれて親しくなっていた。それで後世この石を腰掛け石と名づけて保存するのである。

とある。

この伝説によると、上人は度々美作の国に帰っているのである。佐用人たちとは心やすくなつて、腰掛けている上人のところにあつまつたらしい。

上人の伝記をみてもこのようなことはなにも記されていない。

立教開宗後、上人は美作の国から母と本国

の師（観覚得業のこと）を京都に迎えて孝養をつくしたことは九卷伝のなかにあるが、それとはつきりしていない。

この腰掛け石のことは、如何なる伝記にもない。伝説というのは、まことにおもしろいことで、上人の伝説を調査しているうちに、実におもしろいことが、たくさんあることがわかった。

四国配流の際の伝説、比叡山での伝説などもたのしい。

長い間法然上人の郷土史的な調査で文化史を研究していた自分がうれしくなった。伝説は伝説としてそれぞれに意味があると思う。

史実には如何なるものがある、その地域とともにあるこうした伝説は、なんとかまとめたかと思つてゐる。

この腰掛け石は、法然上人の伝説としてはつきり佐用町に残っているので、村人たちが

抛金してこの石碑を建てたと記している。

たまらなくうれしかったのは、その横を中国縦貫道路がつくられたのに、よくぞ残してくれたと合掌しながら、よろこんだ。しかしもしこれが道路工事で取り除かれて誰にも文句をいうことが出来ない。

今のうちに宗門でなんとかこの石も保存してほしいと思った。

石だけぼつんとあるので、もう少し人々の目に残るものにしてほしいと一人で考えているが、それから二、三日はすぎた。

そしてまたこの腰掛け石を訪ねたくなって、再び佐用町に行ったのである。そのときはこの腰掛け石に、すぐ行くことが出来た。

そうして、石のところに着いておどろいた。腰掛け石にはちゃんと屋根がつくられている。車からおりて前に立ってみると、美しい花があげられている。

花筒も出来ているのである。

誰がこのようにしてくれたのであろうか。

そう思いながら、石碑の横の札を読むと、屋根を建ててくれた人も、花筒をつくってくれれ寄進の人の名前があった。

それは兵庫県上郡町の真宗の寺院とその門徒である。

浄土宗ではなかった。

ときどき真宗の門徒が、ここにお参りするとのことであった。

真宗の門徒のをの信心の深さに強く心うたれたが、浄土宗の檀信徒もお参りしてほしいと思ったことである。これで腰掛け石も、後世まで残るのではないかと思つて安心してゐる。

(了)

◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十四巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進をお誓いいたすところです。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、ここに心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

に　こ　に　こ　法　話

〔2〕

ミ　ー　ち　ゃ　ん　塾　へ　行　く　？



夜の七時も過ぎ、プロ野球を見ていたお父さんが心配げに言いました。

「ミーちゃん遅いな、どうしたんだろ」

「あの子ね、今日お友達といっしょに、塾を見学に行ってくるって言ったの。それでももう帰ってきてもいいころね」

「塾ね、ミーちゃんもう五年生だからな」

はせがわ　たいじゅん
長谷川　岱　潤

（東京・品川区戒法寺住職）

「なんかうちの子とあと数人ぐらいたけで、あとの子はみんな塾に行ってるんですって」

「まあ、人は人じゃないか」

「あら、普通は親が子供を無理にでも塾に行かせてるみたいですよ」

「それじゃ、うちが異常みたいだな」

「そうかもしれないですね。今の世の中から

すると」

お父さんとお母さんは顔を見合わせて、クスクスと笑いました。

「ただいま、お母さんたち何笑ってるの」

「ああミーちゃん、おかえりなさい。今ね、

あんたを塾にも行かせていないうちは、異常だねって言ってたの」

「そうかもしれないわね。だってお友達みんな行ってるんですもの」

「ミーちゃんはどうなんだ、行きたいのか」

「ううん、別に行きたくはないけど、ああいう雰囲気見ると、なんか不安になっちゃうのよね。やっぱり行かないと、いい中学には入れないかなあって」

「塾の雰囲気どうだったの」

「なんかね、怖いというか、真剣勝負っていうか、もうすごい迫力なの」

「ああ、お父さんもテレビで見たことあるけ

ど、あれば異常だね。人間を育てるといった意味での教育とは全く無関係で、単なる受験の技術を教え込むロボットみたいな教師が、ガアガアわめき立てていて、お父さんは情けなく思っていたんだ」

「お父さん、そんなこと言ったら身も蓋もないじゃない。今の世の中塾に行かなくちゃ受験競争からはみ出しちゃって、いい中学に行けないの目に見えてるんだもの」

「全く悲しいけどそうみたいね。私も前から塾のこと考えていたんだけど、お父さんが絶対反対するだろうし、私も今から勉強勉強っていうの嫌だから、もう少し後でもいいかなって、考えていたわけなの」

「そりゃあそうだろう。小学校五年なんて、まだまだ遊び盛りじゃないか、お父さんの時代なんか、塾なんか思いもつかなかったけどな」

「お父さんの時代と今とじゃ、時代が違うわよ。それに今勉強して高校の続いている学校に入れば、中学時代楽できるんじゃない」「確かにそうねえ。それにこの地区の公立の中学、なんか不良みたいなのがが多いから、私も心配で」

「母親がそんな見た目のことを言うもんじゃないよ。まあとにかく食事しよう」

お父さんにとっても、娘の進学は頭の痛い問題です。しかし娘を塾に行かせて受験を迎えるのは、受験競争のルールに乗るようでないとなんか嫌だったのです。この競争社会は、人間の発育にとって最も大事な時期に、最も大事な心の発育を阻害しているように思えて仕方なかったのです。

「ミーちゃん、ミーちゃんが塾に行きたいと思っているなら、お父さんはお金を出してあげる。唯これだけは約束しておくれ。学校の

成績や、選ぶ学校によってお友達を判断してはいけないよ。それからミーちゃん自身も成績だけで学校を選んではいけないよ。学校のことをよく調べ、校風や、どういう先生がいるかなど、先輩などから話をきいて、慎重に選びなさい。お父さんはミーちゃんを信頼しているよ。受験競争ぐらいで駄目な人間にならないことをね」

「わかったわ、お父さんありがとう。まだ私、塾に行くとは決めてないの、よく考えてみるわ」

「ミーちゃんがその気なら、私も少し探してみるわね」

お母さんとミーちゃんは洗い物をしながら二人で話しました。

翌日もまた七時を過ぎてもまだミーちゃんは帰ってきません。

「今日もミーちゃん塾の見学か」

「いえ、今日は何も言っていなかったんです
けどねえ」

「ただいま」

ミーちゃんがぐったりして帰ってきました。

「どうしたの、今日も塾」

「そうじゃないの。今日は担任の先生に頼まれちゃって、ほらその角の家のゆきえちゃん、もう五日も学校休んでいるんだ。何かはつきりしないから見てきてくれないかって言われて、寄ったの。そうしたらどうも登校拒否なのよ。本人とはあまり話できなかったんだけど、そこのお母さんに捕まっちゃって、こんな時間になっちゃったの。ああ疲れた」

「それは大変だったねえ」

「ゆきえちゃんのお母さんが言ってたよ。小さい時あんなにおとなしくて、素直で、我がまま一つ言わない子だったのに、何故急に私

の話も聞いてくれなくなっちゃったのだろう
って」

「登校拒否っていうのは、反抗期がなかった
子によく興る現象なんだよ」

黙って聞いていたお父さんが、ぼつりと言
いました。

「へー、私は反抗期あった」

ミーちゃんが茶化し半分にきました。

「ミーちゃんは、ズーと反抗期みたいだもん
ね」

「ひどい、全然成長してないみたいじゃない。
ところどころでさ。お父さん、先生は病気になるなら絶対に学校に出てくるようにいって、
強く言うんだ。ずる休みなんかするやつはだ
めだ、だめだって。でもさ。ゆきえちゃん、
私がどんなに強く言っても、そっけない返事
なんだよ。どうしたらいい」

「ミーちゃんはゆきえちゃんのことどう思う

の」

「何かやつれていて、可哀想だった」

「登校拒否っていうのは、本人はちっとも悪くないんだよ、やはり元を正せば親の責任だと思うんだ。小さくて力のないときに反抗しないように抑えつけてきた反動が、今出ているだけなんだよ」

「可哀想なんだね」

「でもね、誤解しちゃだめだよ。学校を休むなんてこと、そんなに悪いことでも何でもないんだよ。休んで遊んでいるんじゃないけど、家で勉強してるんじゃないよ。そんな悪人みたいに思ったりしてはいけないよ」

「でも、先生はすごく悪いことみたいに皆に言っているよ」

「学校の先生はそう思うんだろうけど、もっと大きな目で見なくっちゃ。お父さんが言っているのは仏さまの目で見たらどうかって言

っているんだよ。人間が育つというのは、レールに乗っていいばいというわけじゃないでしょ。例えその子がここで一年みんなと遅れても、その子にとっては大変な成長になるかもしれないよ。それをここでむりやり学校に行くことだけを強制したって、その子にとっては返ってマイナスだと思うんだ」

「だって、世の中はそう見ないんじゃない」

「確かにそうだね。今の日本みたいな競争社会ではね。でもねえ、そんな社会の価値観が正しいとはお父さんには思えないんだ。……ちよっと難しいかもしれないけどいいかい。お父さんはお寺のお坊さんだから、先生とは立場が違うんだ。言ってみれば、法律や、道徳は世の中のためにあるかもしれないけど、宗教っていうのは違うんだ。宗教っていうのはその人個人のためにあるんだ。今、目の前にいるその人を救うためにあるんだ。そして

本当に正しい道を歩むための羅針盤を与えているのが宗教なんだよ。その歩むスピードは各自違ったって良いんだよ、スピードメーターなんて無くていいと思ってるんだ」「今はスピードの競い合いみたいだもんね」「また宗教の話になっちゃってごめんね。ミィちゃんにはスピードメーターなんか見ないで自分の道を歩いてもらいたいと思うんだ。そして何よりも一番大事なのは思いやりと優しさをもちことだと思うんだ。だからゆきえちゃんに同情してあげて、良い話相手になってあげてね。そしてゆきえちゃんのお母さんには、ゆきえちゃんを責めないようにって、よく話してあげてね」

「うん、わかったわ。私、塾なんか行くの止めてゆきえちゃんの話相手になろうかな」「今はそれも良いかもしれないね。そうしてあげればゆきえちゃんも喜んでくれるでしょ

う。でも、ミィちゃんはミィちゃんの生き方をしなければいけないよ。ミィちゃんが一所懸命生きている姿を見せることが、ゆきえちゃんにとっては一番良い励ましになるんだからね」

「わかってるって。私、ゆきえちゃんの家を塾にするの。だって、ゆきえちゃんってすぐ出来る子なんだよ」

「そりゃいいや、ミィちゃんは良い塾の先生をみつけたね」

お父さんとミィちゃんが大笑いをしている横で、お母さんは不思議そうな顔で二人を見つめて言いました。

「親が親なら、子も子ね」

するとお父さんが大まじめな顔になって、

「いや、世間が異常なんだよ、こんなすばらしいミィちゃんをもって我々は幸せだね」

三人とも顔を見合せて笑いました。

東西宗教の交差点 [3]

橋 物 語

今年は、本州と四国をつなぐ瀬戸大橋が完成して、日本の橋の歴史にあらたな一頁が加えられた。世界最長の釣橋、これに始まってこの橋にかかわる話題は、このところ私たちの身辺にこと欠かない。橋梁工学上の技術水準は、もとより世界に誇れるものだろうが、何よりも嬉しいのは、その姿の美しいことだ。「はし」とは、もとは一方の端からもう一方の端をつなぐものであった。つまり此岸から彼岸へのかけはしである。

福嶋瑞江

そのもっとも素朴な形は、山中の流れに自然に倒れた枯木であった。また、川の浅瀬に石を置き、その石伝いに向こう岸へ渡ったとも。そして藤蔓を編んで釣橋を架け、舟を並べて浮橋を渡したのも、人の智慧の証である。この端と同根の「はし」が、橋と記されるようになったのは、もちろん大和言葉が漢語表記に当てられてからのことだが、わが国で記録に残る最古の橋は、仁徳天皇の時代に摂津にあったといわれている猪甘津いかづつの橋とされ

ている。その後、推古天皇の時代に百済から渡来した工人たちによって架橋技術が伝えられ、いわゆる唐橋がわが国にも架けられるようになった。

しかし、本格的な石造りのアーチ橋は、寛永十一年（一六三四）に、長崎の興福寺第二代住職、中国の僧如定によって架けられた長崎の眼鏡橋に始まっている。こうして橋はやがて鉄となり、コンクリートとなってその姿も時代の変遷とともに変わっていく。

だが、なんといっても、日本の橋は木の橋である。日本三奇橋といわれる周防の錦帯橋も甲斐の猿橋も、また木曾の懸橋もみな木橋というのもうなずける。このやさしい木の橋は、人の思いも渡したにちがいない。万葉集をはじめとして、伊勢物語からとられた能の『杜若』、山本周五郎の『柳橋物語』に至るまで、橋は日本文学にさまざまな姿で登場して

くるようだ。

万葉集には、柿本人麻呂も明日香皇女の殯宮歌の冒頭に、

飛ぶ鳥の 明日香の河の 上つ瀬に 石

橋渡し 下つ瀬に 打橋渡す

と詠じている。この打橋とは木で造った仮りの橋のことだが、上流と下流の瀬にかけられた石橋と打橋の二つの橋を対照的に示しているのは興味深い。

それよりも同じ万葉集で忘れられないのは、東歌にある次の情景であろう。

足の音せず 行かむ駒もが 葛飾の
真間の継橋 やまづ通はむ

今も、市川市の真間の手古奈堂の近くには、後人の手になる古びた橋がその名をとどめている。手古奈のような美しい女のもとに通うのに、足音のしない馬があったらいいと思うのは、男性の真情を諷って微笑ましいかぎり

だが、この木を継いだだけの橋を渡るとき、あの独特の音に、私にはいかにも日本情緒をたたえた懐かしい響きが聞こえてくるような気がする。

これに比べると漢字の橋の喬は、もとは先端の曲がった高いものの意で、丈の高い撥ねつるべを表わした。そこから川にかけた橋に転じたというが、なるほど中国の橋といえば、峨々とした山の中腹に、湛々と流れる大河を渡る橋梁を下から仰ぎ見る気がする。それなら悠々と瀬戸内海を横切る瀬戸大橋こそ、まさにこの名にふさわしいのではなからうか。

ところで、この橋の全容を真に美しいと見たのには、それなりの訳があった。実は、この橋の景観設計者太田俊昭氏が、東京新聞紙上でみずからその秘密をあかされている。氏によると、これは岡山の後楽園の踏み石の配

列がヒントになっているという。これと島伝いに延びる瀬戸大橋のイメージが重ったのだ。そして二本の斜張橋の橋脚に「鼓」、主塔に「兜」、ケーブルに「城の屋根」の姿形が取り入れられた。まさに科学の粋と伝統美との結実が、この美の造化をなしたと言えよう。

橋が完成されると、待たれるのは渡り初めである。今は開通式と味気ない言葉で呼ばれるが、かつては橋の完成を祝って橋供養が行われていた。それはどういう形式で行われたのであるうか。完成を祝うというよりは、その工事で犠牲になった人びとの供養であったにちがいない。

この供養ということにかけて、日本には一つの興味深い橋が残されている。それは、名古屋市熱田区精進川に架かる裁断橋である。この橋の由来については、先月『日本の橋』と題してNHK総合テレビでも放映された

し、またおよそ橋に関して書かれた文章で、これの右に出るものはないと思われる「日本浪漫派」の保田與重郎の筆になる秀逸高調の評論『日本の橋』にも詳しく述べられているので、ここに再説するのは憚られる気もするが、あまりに心を打たれる話なので、あえて書き留めておこう。

この橋は、今日では精進川が塞ぎ止められて名ばかりになってしまっているが、この橋の欄干につけられた青銅の擬宝珠の一つに、創建当初そのままに、次のような銘文が読まれるのである。

てんしょう十八ねん二月十八日に、をたはらへの御ちんほりをきん助と申、十八になりたる子をたゞせてより、又ふためともみざるかなしさのあまりに、いまこのはしをかける成、はくの身にはらくるいともなり、そくしんじやうぶつし給へ、

いつかんせいしゅんと、後のよの又のちまで、此かきつけを見る人は、念佛申給へや、卅三年のくやう也。

秀吉の小田原攻めに加わって十八歳で戦死した、わが子堀尾金助の三十三回忌供養のために、母が涙ながらに架けたこの橋は、この母の願いどおりに後々の世まで、渡る人ごとにお念仏を唱えさせずにおかなかったであろう。逸岩世俊とは、金助の戒名である。これこそ、此岸から彼岸へ渡る橋にたがわず、その道はそのままお浄土へと続いているのだ。さて、ひるがえってヨーロッパの橋を考えて見るとき、それはひたすら道の延長であった。つまりヨーロッパ人にとって、橋とは谷や川を通過するところであり、横断するところであったのだ。

フランス語の橋 Pont の語源は、サンスクリットの pāṇthā からギリシャ語の panteo、ラテ

ン語の Pons と何れも Passage の意味である。面白いのは、ローマ・カトリック教会の高位聖職者を Pontife と呼ぶが、これは橋を架ける工事や計画の指揮官を兼ねていた古代ローマの神官をこう呼んでいたために、それが現在このような名称に引きつがれていることだ。

そこで、ヨーロッパの橋でまず云々されるのは、きまってローマ時代の水道橋である。彼らが石と煉瓦で構築したこの橋は、水位を保つためにあるところは低く、あるところは高く、延々と長く延びてゆく。今でもスペインのセゴビアの町中に、その往時の雄姿の遺構をつくづくと眺めた方も多いと思われる。

こうした架橋技術は、やがて全ヨーロッパに拡がり、これにあらゆる装飾がほどこされて、橋はある意味で芸術作品にまで高められていった。例えば、パリの市内を二分するセーヌ河に架けられた橋の数は多いが、なかで

もグランパレに近いアレキサンダー橋は、その一つと言ってよい。この見事な彫刻に飾られた堂々たる橋は、立派としか形容の仕様がないくらいだ。

しかし一本一本の橋の美しさよりも、川の兩岸にバランスよく発達したヨーロッパの町には、そこに架けられた何本もの橋で、その町を特徴づけているところが多い。モーツァルトの生まれた、オーストリアのザルツブルグも、そんな町の一つである。町の中央をやや曲線をなして流れるザールツァハ川には、町の道筋のどれにも橋が渡され、確かに通路 (Passage) と呼ぶにふさわしい。行き帰りに別の橋を渡って歩けるほどで、どこか閑雅な趣がある。モーツァルトの音楽のリズムそのものである。

ところで、ヨーロッパの橋は、また巡礼の道にかかる橋でもあった。スペインのコンボ



—アヴィニヨンの聖ベネゼ橋（フランス）—

ステーラへの巡礼路の橋のたもとは、聖人の像が建てられている。しかし、これはまだ信心の道標の役にすぎないが、チエコスロヴァキアの首都ブラハにあるカール橋は、両側の欄干に立ち並ぶおよそ三十の聖人像で、渡る者を神秘的な世界へ誘ってくれる。ヴァロック彫刻の北限と称せられるこれらの彫像は、一体誰の手になるのだろうか。彼らは名を残すことはしなかったが、深い感銘を人の心にも彫んだのだ。

ヨーロッパの橋の話で、どうしても記しておきたいのは、南フランスのアヴィニヨンの街はずれ、ローヌ河にかけられていた聖ベネゼ橋である、これは、

アヴィニヨンの橋の上で

踊ろうよ 踊ろうよ

みんな輪になって……

という童謡で、日本でも知られた橋だ。

今は四つのアーチを残して、先は崩れ落ちたままになっているので、向う岸へ渡ることにはできない。すぐ下手にこれと並んで新しい橋を設け、こちらはそのままの姿で保存されているのは、次のような伝承が伝えられているためであらう。

一一七七年のこと、中央フランスのヴィヴアレに住むベネゼという名前の羊飼いが、ローヌ河に橋を架けるようにとのお告げを聞いた。すると、一人の天使が現れて、この男をアヴィニヨンの橋を架けるところまで連れてきたのだ。市のお上も教会のお偉方も、馬鹿もの扱いして相手にしなかったが、この男がわけもなく巨大な石を動かすのを見て、市民たちはすっかり平伏してしまい、そこで大勢のポランティアがでて「橋架け兄弟会」(Fères Pontifes)が作られるまでになった。寄附金もわんさと集まって、十一年後に橋は完成した

という。

ここまでは、よく聞くような話に思えるが、この橋をそれ以上のものになっているのは、橋柱の一つに小さな聖堂が建てられていることである。それも二階建てになっていて、下はロマネスク様式、上はゴシック様式がとられている。聖ニコラと名付けられたこの聖堂は、今はどう何の飾りつけもされていないが、橋の完成を祝って、この人びとは、この聖堂で神に感謝の祈りを捧げたにちがいない。

またここを通る旅人も、旅の無事を祈っていったであらう。橋の上の聖堂で祈った人びと、そして何よりも聖堂をもつ橋。この橋の上に佇みながら、私はひとしおの感慨に浸っていた。時の流れとともに、ローヌ河の水も、この橋の下を止むことなく流れてきた。そしてこれからも流れていくのだ。この橋の影を宿して。

四

行

詩

泰山木

青梅雨に白い花
緑の葉蔭に楚々と咲く
大輪には 凜とした気高さ
枯色には 哀れなる花姿

清^{きよ}

川^{かわ}

宗^{そう}

治^じ

(詩

人



好評の新刷

『浄土』誌連載の珠玉の回想記

父と母、そしてふるさとへのはるかな想いをやさしく綴る

『み仏とともに』

——父母に捧ぐ浮生の記——

大正大学学長

安居香山著

B6判 二〇〇頁

定価 一八〇〇円 千二百〇〇円

△発行△ 山喜房仏書林

千130

東京都文京区本郷五―二八―四

(振替) 東京 〇―一九〇〇

木

下

隆

一

随

筆

集

15

海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(1)—

木の
下
隆
一

去年の秋、本当に久し振りに映画館で映画を見た。いまはやりの座席数三百程の新しい映画館である。いかにも取り澄ました感じで、一時代前の、盛り場の大きな映画館が持っていた猥雑さは無かったが、それだけに「これから映画を見るんだ」という一種異様な昂揚した気分にはなれなかった。

映画は「ハチ公物語」で、扉を引いて中に入ると、最後のシーンを上映中であつた。老いさらばえた「ハチ」が、雪の朝渋谷の駅で、誰に看取られることもなく死んで行くシ―

ンである。動かなくなった「ハチ」の上に雪が降り積もって……見ているうちに涙もなく涙が流れた。「終」の字がスクリーンから消えて、館内のライトが点ると、客席には私を含めて三十人足らずの観客がいるだけで、空調が効いて適温を保っているにも拘わらず、館内の空気は寒々としていた。映画離れが言われて久しいが、ここまで落ち込んでいるのかと、大袈裟に言えば慄然とした。「ハチ公物語」は日本映画の中では良心的な秀作の部に属すると評判の作品だったが、それがこの体たらくなのである。

この映画の私の観点は、「ハチ」に選ばれた犬がどういう動き方をするか、また演出家がどこまで自在に犬を操れるかであって、人間の演技はどうでもよかったのである。従って「ハチ」の出生シーンを始め、何箇所か犬の動きに不自然さを感じて失望したが、再度目にした「ハチ」の最期には、やはり涙を抑えることはできなかった。

「ハチ」の実像については、帰らぬ主人を待ち続けたという忠犬説と、野良犬となって駅前の屋台で残飯をあさっていたとする相反する二説があるが、私はどちらの説も正しいとは思っている。夕方、出迎えた飼主の上野博士と帰って行く「ハチ」の姿を見かけた人は大勢いたし、博士亡き後、駅の雑踏の中に坐っているうらぶれた「ハチ」を見て、ああ今日も来ていると惻隠の情を催した人もいただろう。中には、今日もいるかな、と期待しながら電車を降りた人も少なくなかったはずである。そんな人々の心の中に自然発生的にいつか忠犬の伝説が芽生えたのではないだろうか。「ハチ」にしてみれば、子犬の時秋田県の角館から何十時間も汽車に揺られて、仮死状態で東京に着き初めて抱いてミルクを飲ま

せてくれた博士を、錯覚から母親と信じて慕っていたに過ぎなかったのかもしれないのであるが……。一方残飯あさりの説が生まれたのも無理はないのである。野良犬となった「ハチ」が生きたために餌を求めるには、駅前の屋台巡りをするのが一番手っ取り早かった。餌場としては、そこしか無かったと言ってもいいかもしれない。屋台の人たちは事情を知っているだけに、「ハチ」にはやさしかったと私は想像する。そして、もしかすると最初に忠犬説を唱えたのは、ここで働く人たちではなかったか、映画を見ているうちに、私はそんな思いに駆られたのであった。

いずれにしても、「ハチ」は体は大きかったが、気のやさしい大人しい犬であったに違いない。一度でも人間とトラブルを起こしていれば、忠犬の名を得て銅像にまでなることはなかったであろうから……。

「ハチ」が日本で有名な犬なら、世界的に有名なのがビクターのトレードマークになっている犬であろう。蓄音機のラッパ型の拡声器に首を突っ込むようにして、何かに聞に惚れているあの犬である。かつてこの犬が雄か雌かというのが、ラジオのクイズ番組に出題されたことがあったが、蓄音機の下に、His Masters Voice と書かれているところから、雄であることが証明された。犬が首をかしげて聞いているのは、故人となった彼の飼い主の懐かしい声だったのである。この犬の名前が「ニッパ」を知ったのは、ずっと後年放送会社に就職してからであった。ビクターレコードの童謡部門のレーベルに、ニッパレコードというのがあった。ビクターの宣伝部にレーベルの由来を聞くと、「ああ、これはうち

の商標の犬の名前から頂いたんですよ」と彼は事もなげに答えた。その夜帰宅して、私は nipper を辞書でひくと、「つねる人、はさむ人、噛むもの」通例複数で「釘抜き、やつとこ」また「(馬の)切歯・(蟹、海老の)大はさみ」、複数で俗語として鼻眼鏡、手錠」などの訳語の下に、(英国語として)「少年、小僧、浮浪児」というのが見つかった。「これだこれだ。しかし少年というのは生硬だし、小僧と呼ぶのも可哀そう、浮浪児じゃあまりにもみじめだ。『坊や』あたりが一番妥当かもしれない」と思って、以来このニッパを私は勝手に坊やと呼んでいるが、実は私が物心ついて初めて出会ったのが、この犬だったのである。

昭和十一年、四歳だった私は、両親と広島県三原市の西のはすれに住んでいた。海岸の埋立地に、人絹、麻糸紡績、セメント、重工業などの工場が進出し、古い城下町というだけだった町がようやく工業都市の形態を整えつつあった頃で、三原が町から市に昇格した年でもあった。便宜上西のはずれと書いたが、正確には御調郡西野村に我が家に所在していた。家の東側と北側は低い丘陵で、東の岬のように突き出した山は、頂上に神社があったので八幡さんの山と呼ばれていたが、その山の向こう側までが三原市であったように思う。冬の夜など犬が鳴く草深い里で、私は遊び友だちもいず、体の弱い孤独な子供であった。

父が箱型の電気蓄音機を買ったのもこの年だった。輸入品だったし、一介のサラリーマンの買物としてば可成り高価な物だったから、ボーナスでも注ぎ込んだのであろう。この

縦長の電蓄は、私が爪先立ってやっと中が覗ける程の高さで、蓋を開けると、裏側に色刷りの犬がラッパの前で首をかしげていた。子供の目にはそれが世にも美しい愛らしい物に映った。電蓄を買ってから、父は次々とクラシックのレコードを買い揃えて行った。その殆どがビクターレコードの赤ラベルで、外国盤だったのか、原盤を輸入して国内でプレスした物だったのかは定かでないが、交響曲などは三枚から五枚ぐらいに分けて収録されていた。とりわけ父がクラシックに精通していたとは思えないのだが、レコードだけは次第が増えて、二つのキャビネットにぎっしり詰まっていたから、最終的には百枚近くあったのではないだろうか。それを毎日のように取っ換え引っ換え母にかけさせて、私は一曲一曲マスターして行ったのであった。今にして思えば、父は私の情操教育のためにレコードを揃えていたのかもしれない。当時の世界的な指揮者のタクトで、欧米の有名オーケストラが演奏する最高水準の音楽を聞いて育ったのだから幸せという他はないのだろうが、音楽に対して耳が肥えるのに比例して自閉症的性格を助長して行ったのも事実である。

その頃父は人絹工場の経理担当で金庫の鍵を預かっていたから、朝は定刻前に出社していたし、夜は第二工場建設の根廻しのための地元有力者の接待で大抵が午前様だったから、我が家は体のいい母子家庭だった。従って私には父と二人で外出した記憶は数える程しかないが、ある時カフェという所へ連れて行ってくれたことがあった。会社の運動会の帰りだったから、多分秋の夕方のことだったと思う。父にしてみればお茶を飲むくらいの

軽い気持ちだったのであるが、私には全く未知の世界で、化粧の濃い着飾った女給さんを見ただけで胸がドキドキした。店に入ると、家にあるのと同じ型の電蓄から耳馴れた音楽が店内に流れていた。「お父ちゃん、〇〇だ」と思わず私が曲名を口走ると、それを聞いた女給さんの一人が、お世辞に「まあ坊ちゃん、小さいのによく知ってね」みたいなことを言った。よせばいいのに私は得意になって「裏は××」と曲名を言うと、それが当たっていたものだから、手当り次第レコードをかけて、私に曲名を当てさせるのであった。私にしてみれば答えるのは簡単だった。どのレコードも日頃私が馴れ親しんでいるものばかりだったからである。父が目論んだであろう情操教育の成果が、女給さんたちの暇つぶしの材料にされただけと言うのは淋しい限りであるが、得意満面で帰宅して私がこのことを母に話すと、「子供をそんな所へ連れて行く人がありますか」と潔癖な母は色をなして父に向かって声を荒らげた。私が初めて見た両親の夫婦喧嘩だった。

勿論その店には二度と連れて行つてはもらえなかったが、その日はカフェと言い夫婦喧嘩と言い、ちよっぴり大人の世界を垣間見た私にとっては記念すべき日となったのである。しがしその代償は大きかった。その夜、昼間の興奮と疲労から私は高熱を發した。電話という便利な物が無かったから、医者に往診を頼む術が無く、母が私を背負って医者に走るしかなかった。最も大きな代償を支払われたのは母ということになる。

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』六月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、再び格調高い小林治郎先生の作品を頂戴することになりました。小林先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度並びに一昨年度の松浦春子先生の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振 替 (東京) 八―八―二―八七

立ち止まるな善導

〈48〉

寺内大吉

挿絵・松濤 遠文

弥陀の化身

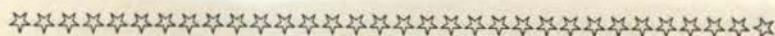
七

人間はいつごろから仲間の埋葬地へ花を献ずるようになったのであろうか。七世紀に生きた浄業や憚良には正確につきとめることは不可能なはずだが、二十世紀末の科学的探査

の結果では「旧人」の時代が最古のものだといふ。

「旧人」——ネアンデルタール人である。十五万年から三万年昔まで生きた人間層を類別している。すなわち最も新しい年代を想定したとしても三万年昔、すでに人間は仲間の埋葬地を花で飾っていたのだった。では、なぜ花で飾ったのか。





山野を狩猟して歩く食肉人種は別として、沃野を求め、荒地を開拓してそこに米や麦、穀物を栽培した人種たちは植物との共存に生命源をもとめた。

信仰はすべて生命の尊厳が基調をなしている。この大地で育くまれた植物の果実こそが人間のすべてを形成する、と考える。

花はその植物の美的象徴であった。

生涯を終えて死んでいった仲間たちは、その大地へ帰納してゆくためにも日ごろ働いている耕地の一隅に埋められたのであろう。そして花で飾られた。

仏教の、とりわけ浄土教は美しい花園に憧れた。花々でよそおわれるのを莊嚴と呼んだ。仏が棲むにふさわしい場所であると考えた。

草庵を片づけていた浄業は、

「これが塵の裏に貼りついていましたよ」と鐵まみれになった一枚の紙を探がし出してきた。善導が命終の床で掛けていた塵のよ

うである。

大判の紙には経句が書きつけてあった。おそらく苦しい息の下で、孤絶した迫りくる死を眼前にしてしまったものにちがいない。これまで発見できなかったのは、

「あわてて塵を巻いてしまったため……」
見落したのである。

——彼仏国土、常作天衆、黄金為地、書夜五時、而雨曼陀羅草。其国衆生、常以清旦、各以衣祴、盛衆妙華、供養他方十萬億仏、即位食時、還到本国、飯食経行。

かの仏国土には、いつも天衆が奏でられており、大地は黄金が敷きつめられる。日没、初夜、中夜、後夜、晨朝、日中——六時には曼陀羅の花が雨となって降る。曼陀羅草はインドで六、七月に結実する清楚な花でシヴァ神に献供される。そこに棲む人々は毎朝、衣

械と呼ぶ器に美しい花々を盛り、世界十萬億の仏たちを供養する。そして食事をとる時間をあてて本国へ還り、物を食べたり食後の遊歩をしたりする。

大略、そんな意味だが、最後の「即位食時、還到本国、飯食経行」には、さまざまな解釈がある。

「善導和上は、おひとりになられた命終の際でもなお阿弥陀経のお写経を続けていたんですね」

少年憚良は眼をうるませた。絶筆とも言うべき師の筆跡が胸へ迫ってくる。

「でも憚良、これは力尽きて中絶なされたものではありません」

「続いて経句がありますね」

——誓到弥陀安養界 還来穢国土人天
願我慈悲無際限 長時長劫報慈恩

「法事讃」の一節で、浄土の往生を願ってそ

の目的を果たし得た者の「誓い」を述べた偈である。前文には「人天大衆、皆来たり集って尊顔を瞻仰し、未聞を聴く。仏を見、経を聞きて、同じく悟りを得て、命おわって心を傾けて宝蓮に入る」とあるが、それを受けこうして安養の浄土に到達できても必ず穢土の娑婆へ還り来たって迷える大衆（人天）が救う、と誓うのである。これこそが限らない慈悲を与え給うた阿弥陀仏の御恩にむくゆる道である。

「法事讃」——正確には「転経行道願往生浄土法事讃」である。

法事は法要儀礼のことで、善導が説法や写経だけではなく長安の諸寺院において独自の宗教儀礼を編みだして指導実施していたことがうかがえる。經典の読誦、仏像の觀察憶持、礼拝称名、そして讃歎供養である。この讃歎供養に本尊阿弥陀仏を歩行してまわりながら散華（花をまき散らす）儀礼も採り入れられたのであろう。この「法事讃」が末尾でこ

んな偈文を添えているからである。

——又願う。此の功德が大唐の皇帝を益し、福基永固し聖化無窮であることを。又願う。皇后の慈心、平等にして六宮を哀愍せんことを。又願う。皇太子の承恩、地よりも厚く、山岳の移ることなきに同じく、福命唐々として滄波に類して尽くること無し。

唐天朝の繁栄を願っている。いつのどれという確証はないが、善導が政庁の大法会の導師に任じ、行道、念仏、往生礼讃を組みこんだ差定のもとに実施した折、この「法事讃」を編述したものと思われる。

「憚良よ、和上はなぜ命終に臨んで、この二句だけを書きのこしたのであろうか」

浄業は自分に問いかける風情で、じっと紙面を凝視している。

「すべてを写経なさる時間も体力もなかったのではないでしようか」

「いや……書き足らなかつたのではありますまい」

「と言うと？」

「ここに和上の願い、ないしは主張が籠もっているように思われてなりません」

「和上の願いですか。主張とは何でしようか」

「この阿弥陀経の一節、また法事讃にも共通した字句がありますよ」

「共通した字句？」

「還到本国と還来穢国とです」

「還到……還来……」

「還ってくるということですよ」

「なるほど」

「浄土へ往生した者が、この穢土、本国へ還り来たるということです。そして仏恩にむくむるため救済の業を継続する」

「亡くなった和上が蘇生するというのでしょ

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

還

來



うか」

「和上、日ごろの教示に従えば不死とか、生まれ替るなどという考えはあり得ません。ただし大経（無量寿経）が説く西方浄土の相を熟解してみると、本願の回向には二つのものがある事実がわかります」

「本願の回向とは？」

「阿弥陀仏がその誓願によって衆生へふりむけたのですよ。ひたすらに浄土を目ざす姿と、そこから還ってゆく姿とです」

浄業は梵文の「無量寿経」を口ずさみながら、その意味を少年惲良に解説してやるのであった。

八

——わたしの見事な願いは成就した。生ける者どもは多くの世界から私のもとへやってきた。わたしの国土にと

どまって永遠に動かぬであろう。

法蔵比丘の阿弥陀仏はこう言いきったあとで、

——ただし、この国土にいる求道者が「私の国土、以前棲んでいた国土も、このようにありたい。その多くの者を救いたい」と願うのであれば、彼は速やかにその国土へ還るがよい。まず無量光の光りを浴び、千億の目ざめた人を供養せよ。

——数億の目ざめた人たちを供養して、神通力を以て多くの国土へ往き、幸いある人たちのみもとで供養をなし終って、朝食の時に幸いあるところに帰るであろう。

浄業は再び紙面へ眼を移し、

「善導和上が阿弥陀経から、其国衆生、常以清旦、各位衣被、盛衆妙華、供養他方十萬億仏、即以食時、還到本国、飯食経行……と書かれたのはこのことでしょう」

懇切に説明する。憚良は一語づつに肯ずきかえして、

「たしか和上の往生礼讃にもありましたね」
 ぼやけた記憶を透視しようとする。

「そうです。日没礼讃の末尾で和上はうたいあげていらっしゃる。願わくば弟子等、命終の時に臨んで心顛倒せず、心錯乱せず、心失念せず、身心にもろもろの苦痛なく、身心快樂にして禪定に入るが如く……」

浄業はそれを補ってやった。
 その「発願文」は続く。

——聖衆現前したまい、仏の本願に乗じて、阿弥陀仏国に上品往生せしめたまえ。かの国に到りおわって、六神通を得て、十方界に入つて、苦の衆

生を救摂せん。虚空法界尽きんや。
 我が願も亦かくの如くならん。発願しおわんぬ。至心に阿弥陀仏に帰命したてまつる。

善導自身が、かねてから往生の実相をひたすらに阿弥陀仏の本願に乗じて浄土へ往生するばかりではなく(往相)、そこで六神通を得て穢土へ還り来たつて永遠の救済にたずさわることを熱望していた(還相)事実がわかるであらう。

大乘仏教の真意からすれば、往生を欣求するだけでは「自利」であつて「利他」はない。厭離した穢土へ還来してこそ「利他」の精神は生かされてくる。

この還相思想は世親の「浄土門五念門」における「廻向門」で明示されている。これを強調したのが曇鸞の「往生論註」で、浄土に往生したあと、迷いの世界へ還つて一切衆生を教化し仏道へ向わせるという「還相」を説

いている。

親鸞は自ら撰した「如来二種廻向門」で「本願力の廻向をもて如来の廻向に二種あり。一には往相の廻向、二には還相の廻向なり」と前置きして、まず往生廻向に三つの門があるとする。

真実の行業、真実の信心、真実の証果に分類している。

行業は「無量寿経」にある「設我得仏、十方世界無量諸仏、不_レ悉若_ク咨_ミ嗟_シ称_ス我名_ニ者、不_レ取_ニ正覚_ニ」を引いて称名念仏の業を言いつける。

信心は同じ「大経」の「設我得仏、十方衆生、至心信樂、欲生我國乃至十念、若不生者、不取正覚」の誓願である。

証果も「大経」の「設我得仏、国中人天、不往定聚、必至滅度者、不取正覚」とし、これらの本誓悲願を選択本願だと決定する。

さらに還相廻向とは、

——「浄土論」曰く。「以_ニ本願力廻向_ニ

故是名_ニ出第五門_ニ」と。これはこれ還相の廻向なり。この心は一生補処の大願にあらわれたり。大慈大悲誓願は「大経」にのたまわく。「設我得仏、他方仏土諸菩薩衆、来_ニ生我國_ニ究竟必至_ニ一生補処_ニ除_ク其本願自在所化、為_ニ衆生_ニ故、被_ニ弘誓鑑_ニ、積_ニ累徳本_ニ度_ニ脱一切_ニ遊_ニ諸仏国_ニ修_ニ菩薩行_ニ供_ニ養十方諸仏如来_ニ開_ニ化恒沙無量衆生_ニ使_レ無_ニ上正真之道_ニ超_ニ出常倫_ニ諸地之行現前、修_ニ習普賢之徳_ニ若不_レ爾者、不_レ取_ニ正覚_ニ」これは如来の還相廻向の御ちかい（誓——第二十二願）なり。これは他力の還相の廻向なれば、自利・利他ともに行者の願業にあらず。法蔵菩薩の誓願なり。他力には義なきをもつて義とすと大師聖人はおおせごとありき。

よくよくこの選択悲願をこころえた
まうべし。

ここで言う「大師聖人」が法然であることは註するまでもない。

その法然は、上野の御家人（武士）大胡太郎実秀へ「つかわす御返事」で還相廻向をきわめて平易に語りかける。

——御身一つにまずよくよく往生を願いて念仏を励ませ給いて、位（くらい）たかき往生をとげて、いそぎ娑婆へ還りて人をばみちびかせ給え。

位（くらい）高き往生が、上品上生のそれを指していることは言うまでもあるまい。上品上生の条件は「三心すでに具すれば、行として成ぜずということなし。願行すでに成じ、もし生ぜずといわば、このことわりのあることなし。またこの三心はまた通じて定善を撰

するの義まさに知るべし」と法然は「選択本願念仏集」で言いきる。

では何を三心とするのか。同じ「選択集」で述べる。「一つには至誠心なり。いわゆる身業にかの仏を礼拝し、口業にかの仏を讃歎称揚し、意業にかの仏を専念して觀察す。およそ三業を超すに必ずすべからく真実なるべし。故に至誠心と名づく。二には深心にして即ちこれ真実の信心なり。自身はこれ煩惱を具足せる凡夫にして、善根薄少にして三界を流転し、火宅を出でずと信知し、いま弥陀の本弘誓願および名号を称すること、下は十声一声などに至れば定めて往生を得ることを信知し、乃至一念も疑心のあることなし。故に深心と名づく。三には廻向発願心なり。なすところの一切の善根を悉くみな転じて往生を願う。故に廻向発願心と名づく」

そして、この前段で廻向を意味づけて「また廻向というは、かの国に生じおわり、還つて大（慈）悲を起し、生死に廻入し、衆生を

教化するを、また廻向と名づく」とと解明している。

この上品上生、外形からすれば聖道門における自力修行に似ているが、三心が規定した「至誠」はいくら修行を積んでも自己の本質が煩惱を具足した凡夫であることを絶対に忘れず、深心で無欲無策の阿弥陀信仰たる他力性を失わず、廻向発願心で浄土に到り得てもなお還相廻向、迷える衆生を救おうという利他の意欲に満ちあふれている事実で、聖道門の自力修行と鮮明な一線を劃するのである。

難行苦行をやりとおして「おれは、これだけやったんだぞ」という誇った気分が一片でも兆せば、それは毒をふくんだ善行ということになる。「外に賢善精進の相を現し、内に虚仮をいだくとは、外は内に対するの言葉なり。即ちこれ外は智にして内は愚なり」(『選集』)と、至誠心が欠落したさまを強調している。

同じ三心でも仏教では各種のものがある。

「大乘起信論」では真如を念ずる直心、善行を身につける深心、すべてを救おうとする大悲心。「唯識」では根本心、依本心、起事心を三心と呼ぶ。浄土宗でも「無量寿経」は十八願の至心、信楽、欲生を三心とし、道緯は淳心、一心、相統心で、法然が依憑した三心は「観無量寿経」から善導が抽出したものである。

ちなみに法然は死の直前(建暦二年正月二十三日・一二二二)随侍する弟子勢観房源智に与えた「一枚起請文」で「ただし三心四修と申すことの候は、みな決定して南無阿弥陀仏のうちにこもり候なり」と明示する。その四修だが、念仏者が心がけておくべき四修の法のことである。

恭敬修、無余修、無間修、長時修を指している。出典は善導の「往生礼讃」に発する。

九

まず恭敬修だ。

念仏者は阿弥陀仏や浄土の菩薩衆たちを礼拝するとき、恭儉な態度を失わないこと、これが恭敬修である。

無余修は、余行に眼を向けず専ら念仏だけを唱え、阿弥陀仏だけを思ひえがいて讃歎、礼拝することである。

無間修は、以上の恭敬、無余の態度をしつかりと守り、しかも念仏を唱えながら怒りや貪り、妄想をえがかず、またちょっとでもこうした煩惱が湧いたときはすぐに反省、懺悔することにつとめる。これが無間修なのである。

これらの修法を生涯にわたって中断することなく励み続けるのが長時修である。すべてを合わせて「四修」となる。

「力いたらぬ下品下生の者は往相を願うだけで精一杯だ。しかし善導和上のように、たゆまずに三心四修に励んで来られたお方は、命終に臨んで還相を御覧になることができたのであろう」

浄業は最後の手に成ったと思われる師の筆跡に顔をおしあてんばかりにして、涙ながらに語るのであった。

「還相を御覧になったのでしろうか」

「なったと思う。この穢土へ還り来たって、衆生に救いの手をさしのべている御自身の姿を」

「ああ、それはどんなお姿でしろうか」

憚良は宙に視線をさまよわせた。どこか一点で「弥陀の化身」がとらえられるのではなからうか。

「永遠に生きるお姿だ。死もまた和上を立ち止まらせることができなかった」

「死もまた和上を立ち止まらせられなかったのですか」

「そうとも。西方浄土へ往生を遂げながらも
なおそこからこの穢土へ引き返して来られた
のだ」

「安らかにお眠りになったのではないのです
ね」

「憚良よ。法華經の化城喻品にこんな句があ
る」

浄業は朗々とそらんじて誦誦した。

——諸人既入城 心皆大歡喜

皆生安穩想 自謂已得度

導師知息已 集衆而告言

汝等当前進 此是化城耳

我見汝疲極 中路欲退還

故以方便力 權化作化城

汝今勤精進 当共至宝所

我亦復如是 為一切導師

見諸求道者 中略而憊疲

不能度生死 煩惱諸險道

旅をしてきた疲労困憊の信者集団は、沙漠
のオアシスへたどり着いた。誰もがその城内
へ入って大いに悦んだ。安らかな眠りや憩い
を得て「これで救われた」と感じた。

だが導師は再び信者たちを集めて言った。

——休息は終わったぞ。よく聴けよ。君たち
は前進するのだ。このオアシスは化城にすぎ
ない。つまり君らが余りにも疲れきった様子
なので、途中で前進を放棄しそうなので、方
便力を用いて、かりにこの城を化作しただけ
だ。君らはさらに精進し、沙漠を進んで、ほ
んとうのゴールへ到達しなければならぬ。

わたしもこうする。また、こうするのが導
師の役目でもある。すべての仏法を志す者は、
途中で怠けて廃めてはならない。生死と、煩
悩の險道は、この限りなき前進によってのみ
克服することができるであらう。

これは仏法の精進が限りなく前進を続けね
ばならぬという比喩でもあるが、現実には二、

三世紀の中央アジアの沙漠でさまよっていた
仏教徒の集団が幾グループ実在したとも言わ
れている。彼らは特定の国土で、権力者の庇
護もなく、いやその庇護が仏法を王法へとね
じ曲げる条件となることを恐れ、あえて沙漠
へさまよい出たのもあった。

オアシスを発見しては、そこにツカのまの
精舎を結び、襲撃してぐる異教徒に追われて
オアシスを捨て、砂嵐にむせびながら流亡の
旅を続けた。

山塊へ到達すると、その断崖を削って、彼
らは長い年月と集団の総力を傾けて、壁に仏
像を刻み、経文を書き遺した。

「それが大乘教団の姿だ」
と浄業は断言する。

そう言えば大乘の諸經典には、釈尊在世中
の教団を、それが栄えたインドという土地
を、深く懐しむ筆調が随処から汲み取れる。
釈尊滅後、アシヨカ王やカニシカ王の強大な
権力者の庇護を受け強大化した仏教々団がそ

の反動として王朝が減びるとともにインドの
地から追われた歴史的推移がそのままうかが
われるであろう。

「長い仏教の歴史は、各国の王権との斗いで
あり、かねたその王たちを如何に教化する
かの角逐でもあった。善導和上の御生涯にも
それはあてはまるのではないだろうか」

と浄業は言いきる。

「伯母のこと………天后のことをおっしゃっ
ているですね」

少年は則天武后と善導との人間関係を思い
うかべずにはおれない。

「天后は、和上の帰依者であって、決して支
配者ではなかった」

浄業の知識は、懷感から与えられたもので
あろう。

「そのとおりです。伯母はいつも和上を慕っ
ておりました。和上のおっしゃる下品下生の
我が身をよく承知していたからです。にもか
かわらず、伯母は強大な権力が掌中にあった

のです。掌中に握っていなければならなかった」

「ひとたび手離せば、我が身が危機に瀕する。それが王者の宿命というものだ」

「悪業をかさねながら懺悔し、懺悔をしながら新たな悪業に手を染めていったのです」

「和上は、そのことを十々ご存じだった。阿闍世の矛盾と悲劇が、天后の周辺にもあった」

「韋提希夫人ではなかったでしょうか」

「いや、韋提希夫人ほど柔弱ではない。天后は強靱すぎた」

いつのまにか二人は、則天武后の話題に熱中していた。

浄業はそれに終止符を打つように、

「涅槃経で釈尊はおっしゃっている。阿闍世王が救われない限り、自分は涅槃へは入らないと」

沙羅双樹の樹林で、まさに息を引き取ろうとした釈尊は、遠く王城で苦悶のあまり失神

して倒れた阿闍世の姿を見た。

——私はいまからこの王のため世にとどまり、無量劫にわたって涅槃へははいらぬであらう。

と宣告されたと「涅槃経」は語っている。これを聞いた迦葉尊者は驚き、

——世夢よ、あなたがすべての衆生のために涅槃に入らないとおっしゃるのなら理解できませんが、なぜ阿闍世王だけを助けるためにそんなことをなさるのですか。

釈尊は答える。

——善男子よ。阿闍世のために涅槃をやめる、という私の言葉をお前は未だ理解していない。私が「ために」と言ったのは、一切の凡夫のためにを意味し、阿闍世と言ったのは、五逆罪を犯した一切の衆生を意味しているのである。

(つづく)

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをニッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜九枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十四巻 六月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和六十三年 五月二十五日 印刷
昭和六十三年 六月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六
発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

待望の新刊

宮林雄彦編

『仏事と信仰生活・浄土宗』

◇◇◇ 浄土宗の檀信徒には必携の書!!

◇◇◇ 平明な記述と豊富なイラストによるあかるい装丁の本!!

四六判美装本 一四二ページ

定価八〇〇円 (T二〇〇円)

△発行・発売▽ 図書出版(有)群書

〒170 東京都豊島区巢鴨四一七一六―四〇三

TEL (〇三) 九一七―八四一一

(振替) 東東七一六八七五九

第五十四巻

六月号

昭和十年五月二十日

(第三種郵便物認可)

毎月一回一日発行

昭和六十二年五月二十五日印刷

昭和六十二年六月一日発行